子どもの見る力

――梶山彩色壁画古墳発見をめぐって――

森　浩一

〈きき手〉　角能清美

昭和五十三年七月、鳥取県で彩色壁画のある装飾古墳が発見された。このことは大きな話題を呼んだので、覚えている方も多いと思う。なぜ大きな話題を呼んだのかというと、これまではないとされていた地域から彩色壁画が発見されたことと、描かれていたのは、大きな赤い魚だったからである。私どもは、この壁画の発見者が小学生であったことに大変興味をもち、彩色壁画古墳であることを確認なさった、同志社大学の森浩一先生にお話を伺うことになった。森先生は一九二八年大阪市生れ。主な著書には『古墳の発掘』（中公新書）『考古学の模索』（学生社）『考古学入門』（保育社）『古墳と古代文化九十九の謎』（サンポウ）等多数おありになる。

梶山彩色壁画確認

――まず、今度発見されました、鳥取県の彩色壁画についてお話を伺いたいのですが。

森　六月の末に鳥取県の教育委員会の文化財の技師をしている、清水真一君が、仕事を離れて、昔から有名な国府町にある梶山古墳を見に出かけたんです。梶山古墳は横穴式石室ですから、一番奥まで入れるわけです。たまたま何人かの人と行ったら、石室の奥に大きな魚が描いてあるのが見えたんです。赤い絵の具、いわゆるベンガラ（酸化鉄でできている赤色顔料）で魚が描いてある。魚だけではなく、三角文や同心円

文も描いてあるのが見えたんです。

壁画というのは、気象条件によって見える日と見えない日があるんです。湿気を含んだ日は見えない。乾燥の状態が非常にいい時だけ、スッと浮びあがるんです。彩色壁画は、日本では九州（福岡、佐賀、熊本、大分）に多いのです。ここに絵の具をつかった彩色壁画や彫刻したものがたくさんあります。しかし九州を越えると少なくなります、四国に線刻壁画がひとつあるだけ、近畿地方には大阪と兵庫に線刻画はいくつかあるけれど、彩色壁画としては高松塚だけです。中部地方にはなく、関東には、茨城県にいくつか、東北には、福島県、宮城県にもある。大きく言えば、日本列島の両端に壁画があるわけです。中間地帯には、古墳壁画はきわめてわずかです。これは古代史にとって非常に重要な意味をもっているわけです。日本列島の両端に壁画が集中していることは事実であり、だから鳥取に彩色壁画があることになると、分布が変わってきます。

ところが、石室の入口がふさがっていて、発掘の過程で入口をあけて、石室の中に壁画があるのに気付いたのであれば、これは誰でも古墳時代のものと言うことができます。しかし、すでに大正時代から世に知られていた梶山古墳は誰でも中に入れました。こういう場合、その判定はたいへん困難で、その壁画が本物であるかどうかを確認し、自信をもって結論を出すのが、ぼくたち研究者の仕事になる。そういうわけで、七月二十日に鳥取の現地に行きました。後日、NHKのアナウンサーの話では、ぼくが壁画を見た最初のことばは「これはまちがいないよ」ということでした。清水君ら、県の三人の技師がついてきてくれましたので、これはまちがいないと言って、皆を安心させたそうです。ぼくは忘れましたけどね。

一目見ると、いいものと、なお検討を要するものと、全然だめなものというように大体わかります。顕微鏡でのぞいて、というような複雑なものではないんです。勿論再検討を要するものは、科学的な方法で確かめなければなりませんが、今度のものは、一目見てしっかりしているものであるとわかりました。そのために他の研究者仲間も、現地を訪れた人はこれを認めました。

確認以前

――すると、どうして今までそういうことがわからなかったのかということになりますね。

森　鳥取には、鋭い金属かなんかで絵を描いた線刻壁画は非常に多いのです。現在約三十か所の古墳に実に見事な、子どもの描いたような（実際は子どもが描いたのではないですけれど）自由奔放な絵がたくさん

あります。線刻画のひとつの宝庫だと思っているくらいです。最近、いくつも見つかりましたが、鳥と魚、あるいは木の葉が多いです。だから西暦六世紀頃は、古墳の壁に絵を描くという風習が強いところです。七世紀になって、線刻という技法にかわって彩色になっていって、梶山古墳を生み出すわけです。

実は十年ほど前に、鳥取の研究者の亀井熙人さんが、鳥取の県立博物館の雑誌にいくつかの古墳の線刻画について発表したのですが、そのときはいろいろな人から強い批判をうけた。ここが最も問題なのですが、それぞれの地方の文化、それぞれの地方のすぐれたものを自分たちで評価する力と意欲が全国的にかなり欠けているんです。このように、鳥取の線刻壁画が世に出た時にも苦労があったのです。今では定着しましたがね。若い研究者たちがせっかく研究してもそれを認めようとしない。これは単に若い研究者の意欲をそぐだけではなくて、それぞれの地域の独特のすぐれた文化を一般の人たちに隠してしまうことになるわけです。何か大和文化に似たものだけを顕彰して、あるいは強調して、独自の文化は日陰においておく。

だからぼくたちがそれを重要だと言ったりして、ちょっとでも手助けになることになればと思って、梶山古墳を見に行ったわけです。梶山古墳の場合には、幸い比較的早い時期に、つまりおそらくぼくが見て、一、二日後にはもう世間でほぼ定着してしまった。そうすると、今度はあれは知っていたという人がぞくぞくとあらわれたわけです。

おとなの思いこみ

――だれでも今まで入れた古墳ですからね。それで、どうなったのでしょうか。

森　専門家は、知っていたのに、とは言えないわけです。どうして知っていたのに黙っていたかということになりますから。そうではなくて、いろんな方が言い出されたのです。一番愉快なのは、何年か前に鳥取県自身が撮りました写真に見事に写っていたわけです。白黒の写真ですけど。鳥取の研究者たちは謙虚に反省してますが、彩色壁画なんてありえないという大前提、思いこみがあったのです。これは非常にこわいことです。

こういう思いこみはどこにでもあります。たとえば日本の四世紀には文字がないということを、おそらく百人のうち一、二の例外を除いては信じこんでいるでしょう。実際のところ、日本の各地からは文字を書いた銅鏡などはたくさん出てくる。けれど教科書的に言えば、西暦五世紀になってやっと渡来人がやってきて教えたことになっている。いつのまにやら先入観ができあがってしまうと、実際にかなりの文字の

資料が地下から発掘されてもそれを評価しない。

また別の例では、万葉集では東国の農民がたくさん和歌をつくっているでしょう。現在国文学の先生方の大部分の人は、東国の農民は文字を知らないが和歌はつくったと思っています。ところが土器に墨で字が書いてあるものを墨書土器っていうのですが、これは奈良県や大阪府からはそれほど出ない。けれども一例をあげると、千葉県八千代市の村上遺跡からは、一か所の集落遺跡で、墨書土器が約二百点でている。極端に言うと、ほとんどの家のあとから墨書土器がでている。字そのものはかんたんな漢字ですけれど。関東の墨書土器の多さを見ていると、万葉集ころの東国の農民も、どの程度かわからないにしても、万葉仮名で表わせる程度の基本語は書けたんじゃないかと思う。それでないと和歌なんてつくれないですよ。

そのように思いこみが非常に多く、いろいろと思いこみをしている専門家が書いた教科書が小学校以来ずっと使われているわけです。さらに学界で問題になったことは、だいたい五年位して教科書に「注」として反映しだします。この頃は少し早くなってきました。ただ専門家の全てが自由な頭を持っている人かどうかわかりません。ということは、学生時代に勉強したことがそのままずっとベースになっていくわけです。ですから各地域それぞれに思いこみがあるというのはやむをえないわけです。

今度の場合でも、いろんな方が鳥取の梶山古墳の壁画をすでに見ていたということ、そして中には高松塚での壁画検出以前に、鳥取県庁に言いにきた人もいたようです。しかし、そんなものはあるはずがないということで取り上げてもらえなかったということです。その中で非常におもしろいのが次のことです。

子どもの目

森　これは鳥取県の郡家町大坪下私都小学校の児童が、国語の教科書に「古墳の話」というのがあるそうで、毎年その頃に古墳を見に行くんです。梶山古墳は石室がきれいで非常に見学しやすい古墳です。その小学校から約三キロメートル離れている。三好孝美先生が、五、六年生男子九人を引率して見に行ったんですね。昭和五十二年十月十五日のことです。まだ世の中で梶山古墳の絵が問題になる前です。その時に子どもたちが、魚の絵があるというので大騒ぎになった。

その学校では学級通信『空いっぱいのぼくら』というのを出していて、その中でこの先生はこういうことを書いています。「梶山古墳は、岡益にあって、七世紀末期の割合新しいものです。玄室はそれぞれの壁が凝灰岩の一枚岩でできていて、なかなか

立派なものです。子どもたちはつきあたりの壁に魚の絵があるといって騒いでいましたが、そういうことはないと思いました。全員無事に帰ってきたようです」と、こういう記録を残しておられました。この先生は子どもたちと絶えず意見交換をやっていらっしゃるようで偉いと思うんです。

そのときの現場の状況を想像してみるとなかなかほほえましい。子どもの方は魚の絵があるといって騒いでいる。先生が「そんなもの、鳥取にはないわよ—」と言っても、子どもの方は魚に見えるといって騒いだのじゃないですかね。今度のことが新聞に載って何日かして、この学級通信が、ある新聞記者の目に触れたのですが、私にとって、最近、これほど愉快なものはなかったんです。こんなものはかっこ悪いから人に見せないのが普通ですが。こういういい意味の反省はすがすがしいですね。この学級通信は、七月に問題になる以前の、おそらく唯一の文字になった記録でしょう。

正直言って、この梶山古墳を、代表的な学者は皆見ていたわけです。もちろんその日の気象条件で見にくい日はありますが、誰か気付いた人もいたでしょう。その中で子どもたちがはっきりと意見をいったというのは、やはり子どものものを見る力はおそろしい。今の教育というものは、うっかりすると、教科書や参考書、大百科事典や塾の教育など、いわゆる常識でおさえつけていくきらいがあると思う。そんなところに、たいへんこわい問題が現在はつきまとっているわけです。

考古学とは

森 考古学というのは、物を見る学問です。つまり古代の人がつくりあげた古墳や家のあと、土器とか石器とか、そういう実際のものから歴史を研究する学問です。ですから非常に子どもの間でもわかりやすいようです。

ぼく自身は、小学校六年生の頃に、その頃は戦争中でしたけど、国語の時間に古代の生活という文章を習ったんです。そのあとで川の中で土器を拾ったので、担任の先生に見せたら、教科書で教えてすぐに落ちているはずはないと言われました。そのときどうしても拾ったものが今のものとは思えない。幸い家には本が多くあったので、百科事典や『日本文化史』という本を一生懸命にひいたんです。そしたら『日本文化史』の中に「土器の内側にうずまき文のある青色の焼き物は朝鮮式土器である」と書いてあった。今でいう須恵器です。それに違いないと思った。この土器は長いことぼくの机の抽出しにありました。ぼく自身、ずっと後になってその土器の破片を見たら、まちがいのない、西暦六世紀の須恵器でした。今はない。安心して放ったのかなあ。取っておくべきでした。

そのときに、もし逆に担任の先生が、かんたんに「これ土器ですよ」と教えてくれていたら、ぼくは意外に興味もわかなかったかもしれませんね。小学校六年生で、百科事典のどこをひいていいのかわからないですから、いろんなところをひいたと思う。そうして確かめていく過程がおもしろかった。そのとき、おとなたちの言うことを信用してはいけないと思いました。小学校の先生が違うと言っても、ぼくは疑っていたわけですからね。

考古学というのは非常に早くから興味を持つ人が多いのです。今でも小学校四・五・六年生くらいの子どもから手紙がたくさんきます。非常に入りやすい学問です。博物館に行けばすぐに実物が見えるわけです。ちょっと郊外に出れば、実際の古墳の上に現実に立ってみることができます。他の学問と違う面ですね。かんたんに身近に確認することができるわけです。

壁画に描かれた魚のなぞ

――壁画に描かれている魚などはいったいどんなことを意味しているのでしょうか。

森　壁画の多くは、本当に自由奔放な絵で、現在の児童画と同じ表現のものもあり、ぼくを含めて皆、意味を読めないのです。鳥の絵ということ、馬が走っている、舟をこいでいるということはわかる。しかしどうしてそこに舟を描いているか、鳥を描くのか、どうして鳥を斜めから見て、羽を小さく描いているのか、いろんなことが解けないのです。残念なことなのです。壁画がどこにあるのか、何を描いてあるか、いつ頃のものかということは、考古学の発達でずいぶんわかってきたけれど、どういう意図で描いてあるのかという根本のことはわからない。

逆に言うと、我々おとなたちが、極めて素朴な衝動といおうか、人間のあたりまえの行動がわからないようになっているわけです。学問的にいろいろの意味をつけるけれど解けない。日本だけではなく、朝鮮にも古墳以外に、自然の岩蔭に描いた魚や動物がたくさんあります。なぜ描いたのか解けません。年代とか文化の系統とかはわかる。しかしなぜ描いたのか解けないというのは、今のおとなたちがあまりにも難しい学問にしばりつけられ、自分たち自身をむずかしくしてしまったのではないかなあ。

――壁画の絵にある魚や鳥は、日本だけでなく他にもありますが、それは文化の流れなのでしょうか。

森　有名なのはフランスとスペインのものですが、イギリス、デンマーク、それからアフリカにもあります。日本のものでも、シベリアのでも、イギリスのでも、皆どこか似ています。だいたい描く対象も似ているし、共通の表現をしています。これは、やはり似た精神の発達状況にあれば、似た

ものを似た方法で描くということがひとつと、もうひとつは、非常に長い時間の中では、人間は動いているわけです。

たとえばポルトガル人のバスコ・ダ・ガマが一四九八年にはじめてインド洋を横断したと教科書では教えていますが、それ以前の中国の焼き物がアフリカの地下からたくさん出てくる。中国人やアラビアの人たちがインド洋を横断して、年中行事のようにアフリカへ行っていたらしい。バスコ・ダ・ガマはヨーロッパ人としてはじめて渡ったにすぎない。今の教科書のような教え方をしたら、人類ではじめてインド洋を渡ったのがバスコ・ダ・ガマだと思うでしょう。人間の移動という問題も、実際でない知識が先にできている。そうではないということが考古学の発達でずいぶんわかってきたのです。

最近アフリカ各国の考古学者はピラミッドのようなものではなくて、自分たちの先祖の残した都市、町を掘りかけています。エジプトや南のローデシアの地下からもおびただしい中国の焼き物が出てくる。日本でいうと鎌倉、室町時代のものです。今までそういうものは歴史の材料にならなかった。今、それではだめだということで、さかんにエジプトをはじめ、アフリカ各国の歴史を復元する。それはやはり考古学です。するとわかることは、人間は非常に古い時代から動いている。そのかわりに長い時間がかかるんです。人間一人の一生の仕事というのは、一回ずっと遠いところまで旅をすればよかったのかもしれません。

たとえば、ソ連のサマルカンドの郊外に宮殿があって、その宮殿の壁画の中に高句麗の使者が二人描いてある。高句麗滅亡直前のものです。高句麗の人達がサマルカンドまで行っている。むこうまで行けば、ヨーロッパの人達がたくさんきている。そこで知識などが伝わってくる。これはたいへんなことです。本当に一生の命を賭けたような旅で、世界中の知識が意外に広い範囲で動いていたんです。

現在の日本の教育

――最後に、現在の日本の教育についてお気づきのことがありますか。

森　一昨年イギリスに行きました。ごく短い旅行でしたけれど。イギリスに有名なストーンヘンジという巨石の遺跡がある。それを是非見たくて行ったんです。十一月の二十八日か二十九日の寒いときでね、雪まじりの雨が降って。ストーンヘンジまでは割合かんたんに行けました。それからさらに奥に行ったところに、ヨーロッパ最大の円墳があるんです。それを見に行って、さらにヨーロッパでもっとも長い古墳、前方後円墳ではないのですが、百メートルほど長さがあるんです。ウェスト・ケネットというところです。それも一日のうちに見よ

うと思ったんです。

雪まじりの雨が降って、牧場の中を横断しようとすると、靴よりも上まで水がくるんです。それに風化した柔らかい土ですから、すべるんです。もうやめようかと思った。ウェスト・ケネットは見えないし、付近には人が全然いない。あきらめかけた頃、若い男の先生と小学生二人が帰ってきたんです。どろどろになって帰ってきた。ぼくはびっくりしました。いきなり現われたのですからね。どうやら古墳を見に行ってきたらしい。ぼくを見て、その服装では絶対だめだと言う。皆は長靴をはいて、レインコートの短いのを着て、それでもどろどろです。しかし、かれらを見てはっとした。つまりイギリスの小学生が見に行って、考古学をしている私がそこまで行ってみないのはだらしがないと思い、行きかけたんです。

途中でぞくぞくと帰ってくる子どもたちは皆どろどろ。四十人くらいの人数でした。皆激励してくれるんです。じっと考えてみると、子どもたちは、最初から雨でも行く服装です。皆、短い長靴をはいて、かっぱを着ている。ひっくり返った子どももいて、もうどろどろです。日本の今の教育で同じことをやったら、父兄から非難がでます。雪まじりの雨の中を行ったら風邪をひきませんかとかね。むこうはそれを承知で、全員が長靴をはいてました。日本の今の小学校だったら、先生方がこんな天候ならやめるとかして、まず副次的なことを心配する。本来の、そこを見せてやろうというのが二の次になる。イギリスの小学生の古墳見学を見て、最近日本には欠けているたくましさを感じました。ぼくがウェスト・ケネットに行けたのも、あの子どもたちがどろどろになって帰ってきたからです。あれに会わなかったら、あのときぼくは、これで行ったら肺炎にでもなってしまうなどと弱気の言いわけの気持ちでしたから、行かなかったでしょう。

また、大英博物館で、ぼくと同時に中学生の一団が入った。そしたら一日いるんですね。先生が印刷したプリントには裏表びっしりと問題がならんでいる。ぼくはびっくりしました。イギリスの文字の発達についての質問でした。ロゼッタストーンのことも出ているし、イギリスで一番古いバイブルの手書きはどれかとか、たいへん克明な質問でした。あれだけの質問を書きあげようと思ったら、先生が何回も博物館に予察に行っているはずです。中学生は朝十時から午後三時までいました。

イギリスは、今、日本人はそれほど関心を持っている国ではないようですが、小中学生の教育はたくましくやってますね。これら二つの例で、ぼくは日本の教育は、今ちょっと、温室育ちで、言いわけの教育になっているような気がするのです。（了）